



草庵和歌集蒙求諺解卷第七

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

秋寄下

妙法院三品は親王家八月十五夜十五首奇令
待十五夜月

妙法院在濟谷道南大佛殿東

うねくよりちかほ秋のあづむとちかほとちかほ月れいでぐてふとちか
いでびていあぐらた也。行路落たよお。あ方より十五夜月を
謝も待拵て。さて十五夜も成ても朝よりあづむのけと。夕方にあれ
ばづんくゆりまう。月をそくいばらやうよとちか也。秋のま
とちかば月よりちかおへきまやう。あづむに待合しゆらう。今夜
の空をいひちかおへきまやう。秋のまもちかおへきまやう。

あつたつた

清子た入道文細言家十首 八月十二夜

秋は初照月なる夜さうと水さきそれ秋もみく
水みづの面おもて照月あきづきをみかざればと秋ぞ秋の中なか也なりけり
樹花じゆゑ散ちる風のなごりよは水さきそんほどもさう
月つきなほは年のなごり也。正月二月。四五七八とさうぶをさう
つ。若さみ極さみかみ人さ。何れ年也。年をほよめて
えゆ水さきそんほども月影の照らさうと。月さきとみく
すして秋の最中とさう也

金蓮寺の歌をほよめて月百首よりみゆり時

ねさうさう

若てはあつたつた月をさきそんほども身さうつらなうとさう
月さきとみくはげとさうとさうとさうとさうとさうとさうと

云々感して我身の百歳のまは五十歳のまもかりにいつた
るきて年のつらさうとさうとさうとさうとさうとさうと
まは五十歳のつらさうとさうとさうとさうとさうとさうと
我身もさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
ふゆへとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと
年為期故曰期共あり 縦有百年今過半 注 元日。范石湖瀛
圭律龍十六

河月を

竹はれちらりさうとさうとさうとさうとさうとさうと
竹はれちらりさうとさうとさうとさうとさうとさうと
川。河内。一説伊勢

里月

さなりよれ川をくわぐらふ極乃くまはむれまふとふ家月を
根の交れど川音も。月も流物されいより。川音をぐらふは
川音の川音たる流物。月も又流也。美豆野の里の川音の
月も流をまきふと流物。美豆野流の東也

沸子た入通土細ま家四喜乃百首秋小

みよれたまる川をらふ喜も。月も又流也。美豆野の里の川音の
たまる河川といふ喜も。月も又流也。美豆野の里の川音の
又美豆野の流物。月も又流也。美豆野の里の川音の
流物も。月も又流也。美豆野の里の川音の
川も又流物。月も又流也。美豆野の里の川音の

はな浄茶よもを侍一奇一 河月

玉清やたる川音たる。月も又流也。美豆野の里の川音の
玉清の川の流物。月も又流也。美豆野の里の川音の

はな月が水のしらうらいてやんやとまはる也。玉清。肥前園也

ふひわたりたりやんやとまはる也。玉清の音たる。月も又流也。
高潔。流河の園也。美豆野の里。美豆野の里。美豆野の里。
也。天子の御膳。供も鳥を侍て。美豆野の里。美豆野の里。
こけの類のう也。さるや下は。月も又流也。美豆野の里。
でもすむ。夜の更も。月も又流也。美豆野の里。
羽がたむやとて。神も月も。美豆野の里。美豆野の里。
のやうも。美豆野の里。美豆野の里。美豆野の里。
里人の音も。遠くも。美豆野の里。美豆野の里。
終まより。美豆野の里。美豆野の里。美豆野の里。

はな長藤よもを侍一奇一 日吉社六首 秋

ともてぬふうのねみふれをてみよの月やねるらん
 都よりその八まゝらねるのよ川ねるやすよのらん 天啓神符 詔言維下
 於河神急いふて。後掌してふをて後よあるゆ人我いふ
 位も果どかねの横川のまのいふれをてくも昔えく四り
 中は月の中りていつまでもすしんとあひ中り也。我長く信ん
 て後てあまを悔らぬことあづべ。ねをてくころよ川を
 みてはいつねとるても月ねるらん也。又一説ねをてよ川を
 てよ月まれもほかに信んてとどおまねのよ川の氷を
 今も月の中りて流らん也。これいふ四の句より。二ねるへのを
 して五の句へはけり句は也。ばねいふれ也

將軍家ゆく歌をほくらて月す首奇よよとさし一河
 河月

小ふれ川よ本まらどい沈月れねをこわらとせしむりて

けい人のまふれをてよふの川をいひんと毎いひげん丹
 生川伊勢也。丹生大明神也。丹生大明神の大明神も。天孫れらと
 了有。河氷の月の流らんは氷のまらんとて。はま本乃代を
 かがすめて。けてい氷をていかにとら也。ま本とわがなは月と
 氷とあひとて。おまも也。思ひとるは。サといほれりわら
 本也。秦旬之一千里。凛々氷鋪 朝詠八月 十五夜 月を氷よんてり詩也
 川清みねのねをて後まは千里の志をる氷也 後成 後成 此
 詩とてよある也

兵庫次長秀家ゆく 後月

くらより川霧いとしてあめこぐさねらりふすある月うま
 夕の霧深と物なれもくらげの月のまらるゆ人川旁暗く
 あり入。舟をこぐ伏保川の流らん。月といふてすし也。舟の棹を
 名前の伏保といひけり也。まらり。あつらうてあつれま紙

ついで有。新波あらたななみよりなるの瀬也。此奇の依保の波口也。依保川
今ハ小川也。昔ハ深くて。舟ふねが針はりと有はる。陵谷りやうこくノ愛
東海素田とうかいすゑだ。古来こらいあり来也。

妙法院宮十首奇合ミチのほりいんみやうじゅうしゅうきあひあひ 澤月さわげつ

ふらりいば辺はたに月つきのやぶる氷こほりもさぐりも露つゆやをくらん
草くさに埋うめまじるはあまは月つきのやぶるもさぐりも露つゆをくらん
どんそえゆるはばをさぐりもさぐりも露つゆをくらん
あまの月つきのやぶるもさぐりも露つゆをくらん

兼問月かねもんげつ

秋あきの夜よに宿やどる月つきも若わかれまふかかしてさくらあやみり池いけあり
新あらたにたのかくれて住すまいけの風かぜのさやもあまに冬ふゆのまふり
拾ひろむ草くさの若わかれまふかかかして住すまい小こ屋やも冬ふゆのまふり若わかれまふ
の枯かれまふ小こ屋やもあまに冬ふゆのまふり若わかれまふ

秋あきの草くさもまふ枝えだどして月つきもさぐりも露つゆをくらん
かた也。本奇ほんきの昆陽こんやうと小屋こやといふけり也。け奇きの名西なにしの方
と伴ともあして小屋こやもこもり人ひと。宿やどる月つきのやぶるも露つゆをくらん

聖護院入道親王家三首せいごいんにゅうだうしんわがさんしゆ 月菴草花げいあんそうか

あまの月つきのやぶるも露つゆをくらん
尾花おしなが波なみの白しろさをいふ。尾花おしながみりも露つゆをくらん
穂ほ并ならに同じおなく也。あまの月つきのやぶるも露つゆをくらん
もこもり人ひと。宿やどる月つきのやぶるも露つゆをくらん

梶井文二かじいぶんじ 浦月うらげつ

あまの月つきのやぶるも露つゆをくらん
床浦とこ。床浦とこも露つゆをくらん
まゆの字あざをけり也。まゆと露つゆをくらん

つら名のこしらへ月の面白きは毎夜秘ごとく秘り也

月茶烟 イニは歌あり

月みくことたるふくろのいかにあふりけりもいそいそねがうら
昔 昔にまぐねが浦清まてえればいざいざもあまは任じう
ねが ねが浦清。奥列也月をえりて烟のさたる物也。さればいかにあ
あまかればこそ月をいさる也。されもいかにあまのあまは月
は烟はそそとまじ。烟をそそははいかにいかにあ
也。月をそそはあまが月とえり也。又外の人が月を見てあ
る。あまが烟をそそるいかにあまのあまは月をそそは
まじ。まじにいかにあまのあまは月をそそは

和秋所三首 海月

いせの海はあまのあまのいかにあまのあまは月をそそは
いせの海はあまのあまのいかにあまのあまは月をそそは
いせの海はあまのあまのいかにあまのあまは月をそそは

いせの海はあまのあまのいかにあまのあまは月をそそは
いせの海はあまのあまのいかにあまのあまは月をそそは
いせの海はあまのあまのいかにあまのあまは月をそそは

等持院贈大長家書 月似鏡

月鏡は信少ぞ移るる二見深いば是れ神代なるをみかりん
月の信少ぞ移るる二見深いば是れ神代なるをみかりん
二見深いば是れ神代なるをみかりん

直巻巻解 二

彈正尹親王家又十首奇小 海辺月

りかや煙いつまきつらんの神にもあはれ月やしらん
煙の月のまらよほしきおちるたの煙をたつらあまらん乃
神もはかふも月の中らぞ存るまきお也い海邊月
とどろたあまの燈煙の月よさる紙恨てしる也 結句
神もはか紙中る月哉 一年の月の中ら神もまき事なるん
と中る月哉也

浦月 浦月 是乃坊わく清子花丈紙云云

浦月

部類云 覺為是法と師子新千載新拾遺新後無作者

月うぶふつうをたつらつらん我身とささるる我身とささるる
みらちるまき我身をささるるささるるやかれさあまのあを
ゆくまは伊勢 我身とささるるにげをささるるひらとひらけて

浦の幸にやうり月煙をたつらはうれ事ながら身の志つぞ
されは是非なく煙をささるる今更はれささるる身とささるる
ちうて身を恨ら也

贈た大僧家少く 月並網を

月をねとみらのとまぶ小網引して難波れ海士乃わらあはし
三津ハ榜列也あはし網を引事也 大文の内まてまこあ
びまたとあごごのあらあはれいびま 何者の津守あはし
のうけれをささるるいひりん志はくあはし 月をささるるけぬ
つ。あわつて月づらさをささるるまうてあをを引事されい
くあま人もあはしにねれ也

江月

伊勢の海やそのうろえれえくともささるる紙をそとあら月教
小形の若はより 淡とくけし雲りわく月の鏡京西白く

二條入道大納言家少

浦月

志不本はむしれ破金の月報よりどしどしおほれ煙きん
 垣本の垣を厚くたれ共也。破金は。破金の家也。あつとすい本
 をいころとまに。又物よこつる事をうけてより。驚き也。垣本
 とけとまねをく破金して。垣を厚くに。煙は月の曇りは。こ
 事い人志びり中とめていれ。志よとのさつり成ゆ。又煙とま
 を。ころねとより。ね煙やあまねりか本とれる。そころね思
 ひよ。立煙也。待たぬ言ふ。雄。画てより思ふ事ぞ。う。業のあら。づり
 かりあげとせん。待賢は。何れ本をころを。懲りて云作
 例よ。いまり。せん方さ。た。を。煙をま。ち。空。ち。あ。は。い。た。事
 む。ち。う。ん。と。思。い。中。り。う。也。

贈た大納言少人月百首

月希無

月をそきぬふげふれさるさうか。よいさうふもをひり火

月の物れた外のおり火は消れとも。破ぐらと後には。月のさ
 事れをそきぬ。あ。の。り。火。の。残。り。也。い。さ。う。い。思。ふ。事。也。あ。ま
 の。あ。ら。う。い。つ。も。同。一。事。也。あ。い。と。通。音。也。

海邊月

わたし人のほごら。宿も秋のよのに。た。あ。ぐ。と。て。ら。や。み。う。ん
 白浪のよす。満。也。を。は。く。と。あ。の。子。さ。い。の。宿。も。は。ご。ら。ず
 後人か。彩。雅。下。ら。あ。ぬ。さ。宿。と。定。め。あ。ま。か。れ。ば。秋。の。夜。は。月。よ。あ。く
 かれて。い。さ。う。宿。も。は。ご。ら。ず。わ。さ。こ。れ。さ。月。と。さ。う。ん。と。也。は。は
 い。さ。う。也。

妙法院宮月十五首

月

けごの魚うろ。あ。ら。と。て。は。す。よ。り。さ。あ。ら。あ。ら。ま。成。い。げ。さ。月。う。ぞ
 け。ま。よ。り。み。ゆ。り。小。橋。の。渡。松。久。く。成。ぬ。若。う。あ。い。す。て。伊。勢
 物。無。は。渡。い。さ。さ。る。と。て。宵。夕。香。の。晴。く。ら。ん。海。上。け。う。み

浪なみのなみつり月つきのさかむ風かぜ面白く。海うみ也。原もとのし
ろさ後也。渡津わたつ海うみ一い神武紀じんぶき云い釣魚つりう於曲浦まがうら。魚うい八十
りくりくけてこれあふい古いにしへ法ほり

海上月いづみづき

しらるるも志こころがーもみしてわづがたためさ波なみをいづる月つきうき
ふちたふハ雲くも曰い絶多たつたともり。舟ふねの動うごゆぐ也。但ただ津つ氏しのふ
しくやが。そめいして。是こゝろもづかふ也。万よろ七とし。我わが公こうゆこのさも
おほしきあけいせもねさふもよりやうねま。是こゝろもあつとふ也
えをさふふも也。かまき。くゆ。大たい舟ふねの猶たと豫よ不定たふふ也。大たい海うみ
くゆもあつとふ也。海うみ東あづまヤそあつとふ。海うみもささる白しろをま人ひと丸まる談だん
音ねに引ひとる。縁えりひさひのあつとふ。公こう君きみもささる。ゆ。海うみ香かふ
期きわらその風かぜをいふためさふ。かまき。い。後のち孝こと王わう會かい。海うみもさ
さ。大たい海うみより月つきのあらぬ。海うみまより。月つきれ。さ。か。み。い。ふ。お。も。屋や

らど。海うみも志こころがーもみしてわづがたためさ波なみをいづる月つきうき
ふちたふハ雲くも曰い絶多たつたともり。舟ふねの動うごゆぐ也。但ただ津つ氏しのふ
しくやが。そめいして。是こゝろもづかふ也。万よろ七とし。我わが公こうゆこのさも
おほしきあけいせもねさふもよりやうねま。是こゝろもあつとふ也
えをさふふも也。かまき。くゆ。大たい舟ふねの猶たと豫よ不定たふふ也。大たい海うみ
くゆもあつとふ也。海うみ東あづまヤそあつとふ。海うみもささる白しろをま人ひと丸まる談だん
音ねに引ひとる。縁えりひさひのあつとふ。公こう君きみもささる。ゆ。海うみ香かふ
期きわらその風かぜをいふためさふ。かまき。い。後のち孝こと王わう會かい。海うみもさ
さ。大たい海うみより月つきのあらぬ。海うみまより。月つきれ。さ。か。み。い。ふ。お。も。屋や

湖邊月うみづき

あふやうの志こころがーもみしてわづがたためさ波なみをいづる月つきうき
ふちたふハ雲くも曰い絶多たつたともり。舟ふねの動うごゆぐ也。但ただ津つ氏しのふ
しくやが。そめいして。是こゝろもづかふ也。万よろ七とし。我わが公こうゆこのさも
おほしきあけいせもねさふもよりやうねま。是こゝろもあつとふ也
えをさふふも也。かまき。くゆ。大たい舟ふねの猶たと豫よ不定たふふ也。大たい海うみ
くゆもあつとふ也。海うみ東あづまヤそあつとふ。海うみもささる白しろをま人ひと丸まる談だん
音ねに引ひとる。縁えりひさひのあつとふ。公こう君きみもささる。ゆ。海うみ香かふ
期きわらその風かぜをいふためさふ。かまき。い。後のち孝こと王わう會かい。海うみもさ
さ。大たい海うみより月つきのあらぬ。海うみまより。月つきれ。さ。か。み。い。ふ。お。も。屋や

望月もちづき

あふやうの志こころがーもみしてわづがたためさ波なみをいづる月つきうき
ふちたふハ雲くも曰い絶多たつたともり。舟ふねの動うごゆぐ也。但ただ津つ氏しのふ
しくやが。そめいして。是こゝろもづかふ也。万よろ七とし。我わが公こうゆこのさも
おほしきあけいせもねさふもよりやうねま。是こゝろもあつとふ也
えをさふふも也。かまき。くゆ。大たい舟ふねの猶たと豫よ不定たふふ也。大たい海うみ
くゆもあつとふ也。海うみ東あづまヤそあつとふ。海うみもささる白しろをま人ひと丸まる談だん
音ねに引ひとる。縁えりひさひのあつとふ。公こう君きみもささる。ゆ。海うみ香かふ
期きわらその風かぜをいふためさふ。かまき。い。後のち孝こと王わう會かい。海うみもさ
さ。大たい海うみより月つきのあらぬ。海うみまより。月つきれ。さ。か。み。い。ふ。お。も。屋や

鳴鶴なげり南飛みなとひ。赤壁せきへき贈くわん。心こころ引ひ合あはる。

古文

竹の小枝より月ののびをきて窓よりさしこみ葉の影を人移して面
白くもき也。月のうけりけり竹影もうつれいさくまり。まれ日の
本のまもりつらうをれ面を影もてえゆるねのり（百首）
合とく日斜疎竹可窓影。正是幽人睡足時。（題瑞室）世間那
有千尋竹。月落庭空影許長。（東坡）月移花影上欄干。（王安石）
月引庭花影上窓。（許梅屋）

花兵衛侍家三条ゆき 関月を

ねさすけり代よき夜け園の戸の月影をさしてさなぬりよ
治れらせむいど。園の戸のほろど。月の影をねも也。まねけり園
乃松系下として月れりふどゆりせりりる。（匡房詞）此言け格也
贈た大長家にて 九八十三夜を

たまらまれば代の昔れ秋より一月と名し。神よこしん成し
上吉天下清りて。明りうなる時代。月も明りこい成しが。今も
そのま

越て明りうなる。今夜のそかり。也。まねけり公の昔まは。い
世はかりてよりの影。神よこしん秋の月の影をさして明り
うなる名し。たし也。名もたしん。願荷りて心もさす。わら也
月影彩

月影のわらむ。つらぬ。窓のうら。まねけり。さす。もの。まね
よも。まねけり。月の。明り。うなる。ゆり。つら。明り。も。まね。けり。何。を
まね。げ。よ。明り。も。まね。けり。也。

讀波守孝約子よき侍の 里月
郭頼云五位少田讀波守 宮内少輔治久男。新千載
新拾遺作者

月影のわらむ。つらぬ。窓のうら。まねけり。さす。もの。まね
よも。まねけり。月の。明り。うなる。ゆり。つら。明り。も。まね。けり。何。を
まね。げ。よ。明り。も。まね。けり。也。
（上） 雑上
（下） 雑下

仙のり也田上存るる

獨吟百首ふ

秋れ田のかりるるれとすをもの病も神ふさるは一月のりけき
のりふのさまよりもの病のりけきもの病も神ふさるのさなれも
神のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき天智
のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき

民部の家七首、月

月をいふまにまのりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
月をいふまにまのりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
月をいふまにまのりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
月をいふまにまのりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
月をいふまにまのりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき

不刺先寺深室、月、おまゝのりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき

野任月

病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき

元盛さといて位の中読れ月をえけり

郭類云。紀元盛傳き。新續古今作者

さい出のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
さい出のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
さい出のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
さい出のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき
さい出のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけきもの病のりけき

儼然と面をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの
 他はまの也。面をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの
 ぶまの面をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの
 の極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 一首の奇れは、ふらふらと、まの極、びりびりたる。儼然とまの
 まの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 ようい若くは、ふらふらと、まの極、びりびりたる。儼然とまの
 をつくまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 ぶのまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 えのまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 思ふまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの

たはつ作和義お下家少く月を

まがらして、まの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 我をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 の極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 うわのまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 めくまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 ぶのまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 西をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 日月、大梵身而教化之。又釋迦五百大願圓之。
 此公をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 之詞、俗よを得るまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 食をうけしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 玄の光、物に射して、玄の極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの
 方を、けしむるまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの極、びりびりたる。儼然とまの

をほきしうす極よすをかくしひてま也。物さいとたをさ
 ひくしと詞也。人をさぐさあつてしうも同一候程也。漢、慰勞
 とまげん也。少のふひとらぐ事也。用むなむさるべうたの
 ちぐさあはくはくもさせんたはわすまをみ一平、おまをせり飛
 ぶも今うい何せんよんててもふらるぐさほかへん 後余か 古意四 空
 蟬のわをさへけくもさぐさあつ 浮於結也 古意 浮草のふ烟ぐあへて
 さいくはほくみやと事。物かかへん かたさあふりやと。志
 のいてお給へる也。多り 養老 びか不丁 あけてまよ
 入道前大政大臣家三首よ かひき 曉更月
 金中さふあははさ病よ新みして於入ぐこの月せさやけま
 曉露の曉くさのよたてほく金ゆへ也。夕露。朝露。同一
 曉文照射よ。曉ハまへんまはさるるあま。氣のうけり
 映し合て。いよく入方れ月のさやけさ也。於いよく也

二條大細言小菟大細言をいほるいて難 かひ 月入るよ
 くくうて又首秋よす すく 時 海上曉月

る あま づつる新をいほるふみゆりやせ月ぞのうくおまらるま
 難 あま けい。西よひくろあまは月い海入也。入方の月れ西乃海
 乃うへよ進く歳て。月のえ宿よく移りて。宿といんよまら
 合 あま 波のときうりて。月い宿と一色よかりうる景色か。皇
 中 あま けい。い宿よ中くつる也。古文後集 あま 王閣序の秋水共
 長天一色。詩格三。乾坤浮水。水浮空。同。三。水似晴。天似水。
 兩重星。點。碧。琉璃。 あま 孝。新後拾遺。後人不知。水やそく流や
 水くもわぬまをいほるいして流る秋の葉れ月 あま 袋。双紙よもあがり引
 合えろへ。茶古の海乃雲のまより極れく入目をあへ入汗
 け白波 あま 後。大。此。前。く。入。方。れ。月。も。同。一。体。か。ら。う。集。入。合。と。と

一

民部卿家八月十五夜十五首

故に残月

里のわきてあそびが原の月影ふ夕時鳥の歌どそのときふ
 任人まわくわれも里をれの影らうあそびをてびうり物
 とては月の影を照しそらに影のありて時也。あやの伴をて
 影のあやふ引寄共くかく但有雞犬不聞車馬聲第廿六
 水自漲溪日自斜オノノリコト盡無雞犬声啼鴉千村萬落如寒
 食不見人烟空見花中韓屋此詩の終いさるるまで終り
 伴也

清子も入道大納言あゆく 月影あそ

心のかたかきくまてしふる月影あそまのかりゆりあそび
 夕より月を巻いて終夜わく朝たかくふれんのかさくまて
 足んとわくしあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの
 かりゆりあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの

かりゆりあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの
 かりゆりあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの

長考家ゆく 曉の月影

月影あそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの
 かりゆりあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの
 かりゆりあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの
 かりゆりあそまのかりゆりあそまのかりゆりあそまの

終の利つとてゆく印がまはる。あまのふりて。いへくちかたあひ
かまうしやうく印中。と。背のりのあひ印ひるもたかくれぬ
か。印さしとめり。西の印うもさくもたかくれぬ。あまのふり
ゆくまも也。一本この白つとままたと有

二條大細言家三首

野鶴

あまてこつちかめり。さきまはいつのそわね。ねりゆし
さしと侍也。と。後。り。と。野。鶴。と。雲。田。小。所。有。鶴。と。さ。し。三
り。の。一。本。ふ。ま。ふ。れ。と。有

獨吟百首

尾花らういりのそわね。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん
尾花らういり。さくさくぐうの春。やよこし成ん

深草。鴨頭草。云。青花と

いづるも也。無え。と。同

さくさくぐうの春。やよこし成ん

上。世中の人が。花。さ。れ

五。青花。緑葉。上。疎。羅。牛

花詩。槿。う。れ。も。月。ま。の。ま。ま。は。ゆ。へ。中。ん。と。く。色。の。う。け。う。か。り

二條入道大細言長樂寺りふ所

合と。と。一。何。接衣

長樂寺。拾芥抄。云。一。篇。或云。唯。眼。宇。多。院。御。時。お

林寺。北。祇園。東

里人の。衣。う。り。か。り。ま。げ。と。ふ。の。あ。ま。や。よ。こ。し。か。ら。ん

此。新。後。拾。遺。抄。下。入。法。賀。樂。近。江。也。接。衣。と。う。り。衣。と

遊可和山まらん関つてき坂の関けられた年をさうり那
多ねらふ秋風のききき山田でさうりして関りてさうりは衣を
サかりて西向こさうりて一平乃何の音ねらふ衣うつをさうり関乃
さねされ人し又衣をさうり也

夕栲衣
誰をさうり常もさうりぬ沙りさうりさうり人乃さうり也

砧ハサウリ人待何さうり物さうりいばさうり沙りさうり
衣れをけさうり侍はもあさうりさうり衣をサササうり
裏ハあれて月やあさうりねてもあれ沙りさうり衣打ん

吟し合さうり

夕栲衣

さうりハ本をさうりさうりさうり也共さうりさうりさうり
さうり月をさうり本をさうりさうりさうり又も衣打音さうりさうり

祇を小本をさうりさうりさうりさうりさうりさうり
之縁れ小をさうり火の影さうりさうり秋さうりさうり夜乃夜乃さうり
秋の葉をさうりさうり夜打さうり家の侍也

二條大和言家月次又首 月前栲衣

ふさち原月乃外ふさち人乃何りとさうりさうりサササうり
われさうり沙りさうりの宿は月のみさうり人いあさうりさうり
人も有さうり衣うつ也澄と住をさうりさうり

関伽井宮月十首よ サササうり

さうりさうり月小秘をさうりさうりさうりさうりさうり
我の月を御さうりさうりさうりさうりさうり何れ
サササうりさうりさうりさうりさうりさうり
サササうりさうりさうりさうりさうりさうり

河子尼大細言家十二首よ

秋露け花より夜月をこぼるに
おのゝまをさうしてすうぶら衣とらう
うづの月よあゝぬをぬく
さ人也

花山院入道大細言家小く 遠村の掛衣

手燈不のらふみゆらふりふを
を射されぬ烟もかのらにさう
三といふ縁よありき村の夕時伴
也

二條入道大細言家能波又首小 海色掛衣

あすれとひさうの破跡ふ音とを
浪の音をさうとくうらうらう
あすれとひさうの破跡ふ音とを
あすれとひさうの破跡ふ音とを

里掛衣

風そよぐ草の葉がくと音とを
別れんくうれてはのぬれさる
風乃吹ゆ草れまうねとらわ
うて小屋かりこわらふかき

里掛衣

里ごの衣さうらう秋ねより
里ごの衣をきて移るものさ
夢をたのそねるものわら
えてさうらう着てふ物は
着とまわらぬ優也作の衣と
衣とさうらうゆいぼの里ね
も

まじおぼるべき程ふたはむいおのそくも枯せはむいほむも
面白くうらたけうどく也枯れたていおれはして也ふらあま
我身そくくもあねむられさどわいのわくもくもか
川水かけまのいつたうおれたてうの二長ゆん
うらうらうらをまおのれ白菊とみる也々々
花をうらうらとわらみるいこまほふはる也々々
秋の葉を一年にこい白くもてんれ
おの色のひらいてはるもある
ひてこるうらうらもわら枯の菊
秋の葉をうらうらとわらみる也

贈た大長宗公一首
君はむいんうらうらも君は代たは長月れあうらうら花
秋より冬とわらわら也大載礼は露結為霜と云も秋より冬

まじおぼるべき程ふたはむいおのそくも枯せはむいほむも面白く
面白くうらたけうどく也枯れたていおれはして也ふらあま
我身そくくもあねむられさどわいのわくもくもか
川水かけまのいつたうおれたてうの二長ゆん
うらうらうらをまおのれ白菊とみる也々々
花をうらうらとわらみるいこまほふはる也々々
秋の葉を一年にこい白くもてんれ
おの色のひらいてはるもある
ひてこるうらうらもわら枯の菊
秋の葉をうらうらとわらみる也
贈た大長宗公一首
君はむいんうらうらも君は代たは長月れあうらうら花
秋より冬とわらわら也大載礼は露結為霜と云も秋より冬
まじおぼるべき程ふたはむいおのそくも枯せはむいほむも面白く
面白くうらたけうどく也枯れたていおれはして也ふらあま
我身そくくもあねむられさどわいのわくもくもか
川水かけまのいつたうおれたてうの二長ゆん
うらうらうらをまおのれ白菊とみる也々々
花をうらうらとわらみるいこまほふはる也々々
秋の葉を一年にこい白くもてんれ
おの色のひらいてはるもある
ひてこるうらうらもわら枯の菊
秋の葉をうらうらとわらみる也

とどゆるが色さすはあはしあぢいぞ思ふははしあぢい

れあしんを

こひほふらういゆを流しやまふくはぬけしあしんあしん

ねぶしは秋あきしきまのちつねぬいゆを流しあしん

こふふのおまふらふを流しあしん

あしんあしんして流しあしんまふらふあしん

ほかしくよ同どう時ぬのぬまかくあしん

あしんあしんて色付いろづらりあしん 秋あきあしあしづのふれあしん

かくらうあしんねむあしんはあしん 是別 古雅 あしん

向まあしんすあしんらあしん袖あしんのせあしんまあしん 伊物 古雅

名あしんくあしんれあしんしあしんらあしんらあしん下あしん葉あしんいのあしんをあしん流あしんしあしん あしん

あしんあしんのあしんぐあしんらあしんをあしん色あしん付あしんてあしんいあしんはあしん色のあしん流あしんしあしん也あしん

あしんあしんをあしん下あしん葉あしんをあしんいあしん何あしんぬあしんもあしん流あしんしあしんてあしん流あしんくあしんてあしんああしんしあしんはあしん

こあしんまあしんしあしんらあしんもあしん。秋あきのあしんぬあしんれあしんさあしんまあしんくあしんたあしんらあしんをあしんとあしんんあしん也あしん何あしんぬあしんのあしん

流あしんしあしんてあしんさあしんけあしんらあしん也あしん何あしんぬあしんのあしん

深あしん心あしん親あしんまあしん家あしんこあしん首あしんに あしんぬあしん葉あしん

ふれ名あしんのあしんまあしんかあしんはあしんしあしんしあしんのあしんぬあしんれあしんまあしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんん

ふあしんのあしんぬあしんらあしんもあしんらあしんいあしん何あしんぬあしんもあしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんんあしん村あしん

何あしんぬあしんさあしんれあしんいあしん木あしん末あしんづあしんらあしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんんあしんかあしんもあしん

かくあしん下あしん葉あしんをあしん下あしん葉あしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんんあしん何あしんぬあしんのあしんぬあしんらあしんもあしんらあしんいあしんんあしん村あしん

何あしんぬあしんさあしんれあしんいあしん木あしん末あしんづあしんらあしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんんあしん村あしん

何あしんぬあしんさあしんれあしんいあしん木あしん末あしんづあしんらあしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんんあしん村あしん

何あしんぬあしんさあしんれあしんいあしん木あしん末あしんづあしんらあしんをあしん流あしんしあしんてあしんいあしんんあしん村あしん

時女は里をまけふりていづれに嫁こそよあれはさうく
ふり来たりはばほめしは跡からくかき。そあはくしんも也
里まてりり。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
一 前 けえくに里まてりり。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
浜うちびつらん。里まてりり。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
取のちがうあま。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
てはの。は河ぬのちがうあま。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
はくしん也。

宗島は下をあらり。日吉社あり。六首あり。名所紅葉
はくしん。空は河ぬれり。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
河ぬは晴るま。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
む。うけて。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
神のね。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも

前園殿よりいづれにのりて。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも
いづれにのりて。ふもこも也。木の上跡からくしんも也。ふも

これに孫のま。やい。はも。と。ゆ。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
流俗のま。やい。はも。と。ゆ。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
宗方御井 拾遺 古春 け。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
らん 後人不知 け。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
し。を。う。ね。ま。と。け。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
一。跡。の。也。

病に相れ。ま。やい。はも。と。ゆ。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
病に相れ。ま。やい。はも。と。ゆ。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
いつい。ま。やい。はも。と。ゆ。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。
いつい。ま。やい。はも。と。ゆ。こ。と。あ。て。た。を。う。ね。ま。と。

幸有り... 秋の外の外れ
木をさし... 秋の外の外れ
く入合て... 秋の外の外れ
あよりて也

秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ

秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ

秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ

秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ

金蓮寺あり 月茶極

秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ

月茶あり

秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ
秋の外の外れ... 秋の外の外れ

を前漢書項禮の錦とあり、思ひくなく、下りり
 ねとのお集り、所の錦也、美之右思ひく、あやかし、その
 いへるには、秋の所の錦也、秋下思ひく、あやかし、その
 ふしとあり、此故、後不不明石巻、よ、後、その
 月の出、内、くら、く、て、下りの所、た、く、が、月、乃、あ、い、れ、の、集、の
 色、乃、あ、い、れ、て、足、ゆ、ゆ、ゆ、の、あ、い、れ、た、て、い、な、い、い、く、乃、錦、也、
 と云、後不不月、乃、あ、集、を、貴、敬、す、り、い、ま、い、れ、後、後不不唐、書、
 云、魏、元、忠、遂、宗、別、拜、掃、上、幸、白、馬、寺、以、送、之、後不不辨、曰、衣、錦、
 畫、遊、在、平、茲、日、後不不あ、い、れ、た、ま、た、る、の、い、の、あ、い、れ、後不不平、也、後不不古、文、後、集、
 よ、歐、陽、永、叔、乃、畫、錦、堂、記、も、此、也、後不不向、信、を、あ、い、れ、
 む、集、の、あ、い、れ、を、ま、り、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 思、好、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 暮、秋、月

時、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 予、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 中、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 庭、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 の、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 續、千、載、集、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 此、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 續、千、載、集、拾、芥、抄、云、文、保、三、年、己、未、四、月、十、九、日、依、後、
 宇、多、院、院、宣、前、樵、大、納、言、為、世、卿、撰、之、二、千、百、二、十、首、
 有、明、の、月、の、あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 有、明、の、月、の、あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、後不不あ、い、れ、
 宮、殿、也、天、寶、遺、事、云、唐、明、皇、遊、月、宮、見、天、府、後不不白、廣、寒、清

虚之府ツクリノツ見素城ミソシ十餘人皓衣乘白鸞ハクイノリ舞於桂マツノ林ハヤシ之ノ云
 いかさまの光りけりんえん系々うらうらとせせのわけごとと書
 のかきん候々も人けけよ月の教人といをねとらうけん獲衣
 引川のとがらねの久方れ音の教の舞也舞より月清云けぬみ
 かくしてまら久方れ月の教の舞やとく舞舞舞中時多下ま
 活らうらうら声と也月乃教よ望かれや妙中三こけり時月宮
 殿也又世系をも月乃教と云奇も世の教とくちてまよ同
 引らひもとてとくしたとさじゆらるる月乃教いんら舞舞也
 候月乃教とてまよの中にならうともそれくいさうん月の教も
 音思入派のぬれを中を月の教よ住めいもを西音は舞 漢音下是の
 け系也 涙は思ふとさびく久方れ月の教れ音方好也古秋
 只い世教と月宮教とをさえてもなり世奇の住吉とては教と
 思ひやりてもうらう月宮殿を思ふもなり世教をなめて

月の教と云思ふも底意は月宮殿よはするをりあり
 獨吟百首

けり秋の暮のあさけらわがきてやぶに小冬れまごうら
 まいさいんやまのいさよとまきか二極を我神神まよ三何
 るらうらうらうの若たや秋やまわん古あうたけはまよに
 小月のみくくうのくはげでいれざあわん物あわなて
 まごこつた名の立田川まよとやせんわな古是は
 ろやまの也 川に入朝白いまよま中をのくもまよままよを也
 しき清神形 須古尺山のくもまよにまよに朝日教得白くまよるゆ系
 秋水定系まよまよはまよをまよとまよも今いつれも早まよ方用
 ひくも也一首の心は秋の暮くけてまよ乃のまよ結するゆまよ
 冬なう結もまよまよ冬まよまよまよのまよゆ也 外心あわは風
 入まよまよまよまよまよのまよまよまよ古世まよのまよまよ

Handwritten text in a rectangular frame, likely a poem or a section of a manuscript. The text is written in a cursive style and is partially obscured by water damage.



